

触ったり、寝そべったりできるお墓

第14回では長く伸びた裾野に、孫たちが座ったり寝そべったりできる山型、自然石のお墓で、群馬県富岡市の土澤 正治さん（当時72歳）が入賞した。思えば妻と私は登山が好きで、それが縁で結ばれました。春は山菜摘み、夏は山女釣り、時には妻と登山と、群馬の山々と深いつながりを持ちながら生活を営んできました。そこで私たちが永眠する墓は、山をイメージさせるものがないと考えていました。お世話になった石材店さんに、自然のままの「伊達冠石」があるとの情報を得、早速見に行きました。そこには、荒々しくそびえ立つ妙義山と雄大な裾野の赤城山を合わせたような石がありました。

娘の夫からの「長く伸びた裾野に、孫たちが座ったり寝そべったり出来るようにすれば、いつもおじいちゃんたちに抱かれているような気がするよ」との提案から、素材そのままの形を生かして墓を作ることにしました。通常であれば墓石に上るなどのもつてのほかでしょうが、孫たちが自由に触れていいという、常識破りなお墓です。

墓石には「蔵」という書をしたためました。「蔵」とは、仏教の唯識で「心」という意味です。娘や孫たちはこのお墓に入ることはないかも知れませんが、ここにすればいつでも心が通じ合います。妻との山々での思い出が、孫たちにもつながる墓。妻と私、そして家族との絆を感じさせてくれるものが出来上がりました。



第15回では、触りたくなる、撫ぜたくなるお墓、カドのない丸みを帯びたお墓で、福岡県北九州市八幡西区の山本 勝さん（当時52歳）が入賞した。

以前よりお墓の形には興味があり、硬い石の角を見るたびに何故、四角いお墓しかないんだろうという疑問から始まり、墓前に立ったときに思わず、触りたくな

る、撫ぜたくなるお墓にするには角を取って曲線を描く必要がありました。亡父は山が好きでしたので、山の安定した形をイメージし、その山の中心に一文字を入れました。この一文字も亡父や我々家族皆がお気に入りの「道」を石工さんに手彫りで彫っていただきました。そして、観音開きの扉には私のデザインした蓮の花を彫って頂き、完成となりました。

全体的にはイメージに近いものが出来たと思います。石材店さんには大変苦勞をして作っていただきました。ごらんの通りの一石彫りの竿石なので、総重量もさることながら、運搬据付もご苦勞があったと思います。現在は墓参りの方々からも思わず笑みのでる可愛い墓と評判になっています。

